
けしごむ

tanuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けじめ

【ZPDF】

Z1935D

【作者名】

tanuki

【あらすじ】

「人生ってのはなあ、キラキラ輝いてる時と泥水をすすって生きるときがあるんだよ。そんときや楽しいだろう。そんときや苦しいだろう。いろんなこと、みんなひつくるめて、楽しい人生だ」「けじめがいいうなよ・・・」

はじめ

正直ないと思つた。

なんでよりもよつてこれなんだ・・と。

世の中もひとつステキでいいじゃないか！夢があつていいいじゃないか！

普段はそんなことまつたく考えない癖に、俺の脳裏にはそんな言葉がぐるぐると回つていた。

「まあ、人生案外そんなもんだぜ？ラクにいこりや」

俺の顔のすぐ下あたりから声が聞こえてくる。いや、なんでそんな立派なセリフを吐くんだよおまえ・・・。

俺は長いため息を吐きながら、大人なセリフを吐けるダンディーな・・けしごむを見つめていた。

激情

その日、日野美一也は朝っぱらから悩んでいた。

「どうした坊主、悩み事があるなら俺に相談しねえか」

「こいつのせいだった。」

田の前の机にポツンと置いてある、こいつのせいであった。

「いいかあ？ 若いうちってのは迷っちゃあ行けねえ。悩んじゃあいけねえんだ。そのときの感情にドンと身を任せて、あとは山となれ、川となれってのが漢つてもんよ」

「……つるせえな、おまえだつて朝からあのカバーがいい、このカバーがいいとかいつてたじやねえか」

一也のいっているカバーとは……、まあけしゃむのカバーである。

「ふう、どうやら坊主の人の揚げ足を取る癖はまだ直っちゃあいねえようだな」

声質から実際のため息でも聞こえてきそうな感じだ。

「なあ、おまえ頼むから絶対に教室で喋るなよ……。もしも喋つたら……！」

「いへり……」

一也が急に普段見せない迫力を出すと、けじ「むから息を呑む音が

聞こえる。なんともまあシユールな光景である。

「・・・おまえをクラスの頭ホワワワンな女子に貸して、恋のおまじないの道具にしてやるーー！」

「お、おめえさんは鬼かい！？いくらなんでもそりゃあ・・・」

「やうなるのが嫌だつたら喋らなうことだな」

「ああ、やうかい！わかつたよーつたく・・・・。」

本人はまったく遺憾のようだが一也にとつては大問題である。
なぜならこいつ・・・ダンけし（ダンティーなけしこむ）は見た目
はまったく普通のけしこむなのである。それでも、声だけはする・
・といつ、まあよくわからない物体なのだが。

「よし、やつをと行つちまおつ

ダンけしが無言待機モードに入ったのを確認し、一也は口に朝食の
トーストを詰め込んで家を飛び出た。

「おはよーひざわこまく

「おはよう

秋の風が少し肌寒い中、ヒルヒルで挨拶をしている。

学校では、クラスの委員長のポジションについている一也もたまに
追い抜いていく、自転車通学のクラスメイト達と律儀に挨拶を交わ
していた。

「今の子・・・なかなか美味そつだつたな」

うつかり大人な（ダンディー）発言をしてしまつたダンけし。
ここからは2秒ほどのうちにあつた出来事である。

一也は歩みを止め、脇に挟んでいたカバンを開け、筆記用具入れからけしごむ（ダンけし）を取り出し、前へ思いつきり投げる・・・!
近くを歩いていた同じ学校の生徒が怪訝そうな顔をしたが、んなもん構つてる暇はなかつた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

思わず激情に身を任せて行動してしまつた一也だったが、胸は満足
間でいっぱいだつた。

（ああ・・・、ダンけしがいつてたのはこいつことだつたのかな・
・・）

一也はとつさにとつて自分の行動を振り返つて、あいつ、なかなか
いいやつだったのかもな・・・。と義務的に心の中だけしごむの遺
影にチーンと鐘を鳴らして、手を合わせながらもそこまで後悔はせ
ずに校舎の中に入つて行つた。

パサッ。

（なんだ？）

下駄箱を開けると、どこか中身の予想できる薄ピンク色の封筒が出
てきた。

一やは、とりあえず辺りを見てからカバンに突つ込んでおいた。

「おはよー」

クラスに入ると、すでに登校していたクラスメイトらが揃つて一也の方を見てホッとした安堵の溜息を吐いた。

「どうしたんだ?」

クラスメイトの少し異様な反応を気にしつつ、席に近づいてみると。
・・自分の席のすぐ隣の窓ガラスが割れていた。

そして、机の上には・・

「いやー、日野美一おまえがもつ少し早く登校してたらやばかった
ぜーーー！」

「ほんと、ほんと。多分登校中の小学生とかのイタズラだと想つけ
ど、日野美君が無事でよかつた」

「つたぐ、誰だよ。今時けじょむなんて投げて遊んでるやつは」

「恐らく、頭の回転が悪く、感情に身を任せてしまつ坊主なんだろうな」

ちなみに最後のセリフは、一也の机の上にガラスの破片と乗つてる
けじょむ（ダンケシ）のものだったのだが、誰も気がついた様子は
なかつた。

「どうする？ガラスのことは勿論言ひつけど・・・、日野美君ももし
かしたら危なかつたって先生にいとく？もしも次もあつたら・・・

「

とても優しいクラスメイトたち・・・、ありがと、本当にありがと。でもいいよ、だってそれ投げたの俺だし・・・。と一也は心中で感謝の涙を流しながら、大丈夫たまたまだよといつて笑いながら、心配するクラスメイトたちを宥めておいた。

クラスメイトたちとガラスの破片を掃除したあと、そろそろ教師が来るかなと落ち着きはじめたクラスでダンケしがぼそつといつた。「坊主・・・、もし俺が飛んでこの席に不時着したっていつたら信じるか?」

「まじっ!ー?」

「嘘だけどな・・・」

一也はまた激情に身を任せて、頭を少しおがいておいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1935d/>

けしごむ

2010年10月28日06時56分発行